

---

# 時の海賊

ターボー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

時の海賊

### 【Nコード】

N7434Q

### 【作者名】

ターボ―

### 【あらすじ】

何も変わらないある朝に起こった人生の転機！

ある少年はもとの世界を捨て新たな世界へと繰り出す。

「…ここはどこでしょうか？」

「は？900年前！？いやちょっと…」

まっ  
…！」

（この作品はオリ主最強小説です。アレルギーの方はご遠慮ください。なお、かなり独自の設定となっております）

## 世界を旅する者（改）（前書き）

初めまして。

ターボーです。

この作品は私の処女作となりますのでいたらない所も多々ありますが、どうか暖かい目でご覧ください。

なお、第一話 世界を旅する者は少し改善させていただきました

## 世界を旅する者（改）

「やばっ！..!」

今日もいつもと変わらない青い空、白い雲、横断歩道の向こう側で待っていてくれる優しい幼なじみ…

何も変わらない退屈な1日の筈だったのに、何故こんなことになったのでしょうか…

私が目覚めた所は真っ白い空間だった。

何もない…

「…ここはどこでしょう？」

誰かがいる筈もないが言うしかない、てかこれしか言えない。

「ここはお、地上と天界の間にある神の間という所じゃ」  
白い空間の奥からそんな声が聞こえた気がした。

「誰かいるんですか！？」

私は声が聞こえた方にそう言った。

奥から沢山の白い髭を蓄えた爺さんが現れた。

「おお、いるとも。君を呼んだのは儂じゃしな。」

「呼んだ！？何故です？」

「実はのう、君の魂にあの世界が耐えられなくてのお、あのままだと世界が崩壊しかねなかったのだ。」

「はあ！？それは困ります！まだやりたい事は沢山あったのに！！  
お願いします！生き返らしてくれ！！頼みますっ！！」

もう恥もプライドも捨ててやる！！

私はそんな勢いで土下座した。

「頭を上げてくれ。お主には何も責任はないんじゃ。お主さえ良ければ生き返らそうと思っと思ったからの。」

それを聞いた私はあまりの嬉しさに涙してしまった。

「ただのう、もとの世界に…とはいかんくてのう。あの世界は容量が小さすぎてお主の魂が入らんのだ。」

私は少しの間考えてしまった。まだ親に恩返しもしてないし、高校

もまだ2年間しか行っていない。

正直に言えば未練がないとは言えない。

…だが何よりも生きることが全てだと思った。

「…分かりました。せめて私がいなくなっても誰も悲しまないよう  
にしてください。」

「…分かった。すまんかったのう。」

「いえ、いいんです。あなたのせいじゃありません。またチャンス  
をくれるんです。感謝してます」

私は心からの気持ちを言った。

「そう言いつてくれると助かるの。」

爺さんはまだ気にしているようだ。

ここは私から話しを変えるべきだろう。

「さて、それで？私はどんな世界に行くことになるんです？」

「……。！！おお、すまん。ええっと……」

いきなり話しが変わって焦ったようだ。

「ふむ、お主には決められた世界に行ってもらう。」

「決められた世界？それは…何です？」

「悪く言えば全てが管理された世界。良く言えばお主も好きな漫画などの二次元の世界じゃ。」

私は気持ちが高揚した。

「おお！何か夢が思わぬ感じで叶いました。ええっと…？全てが管理された世界ってのはどういう事なんです？」

「つまり、世界自体が物語に則って進むからイレギュラーが起こらない、お主が入るのにこれほど良い場所はないという事じゃ。」なるほど…

…あれ？

「んん？でもそれだと私自体がイレギュラーだから、世界の修正力で消されるんじゃないんですか？」

「ふむ。それは大丈夫じゃ。行くのはいわゆるパラレルワールドだし、儂の力でお主の存在をねじ込むからの。」

…これはスルーしていいのでしょうか。

「世界に干渉できるって爺さん何者ですか」

「ただの神じゃよ」

「ああ、そうですか…」

「はあっ！！??」

…見えねえ。

どう頑張っても見えねえよ。

すみません爺さん。

強く生きてください…

「僕はそんなに存在感ないかのう」

「ええ。」

「酷いのう」

爺さんの目が涙目になっていた…。

~~~~~

「さて、いい加減話しを進めようかの」

「ええ…そうですね」

「お主…行きたい世界はあるか？」

私は少し考えた…  
改めて考えてみると、なかなか行きたい世界が絞れない。

「うーん…」

「ゆっくりで構わんからの。」

…ここに連れて来られるすぐ前に見たアニメでいいか…。

「よし！私は…ワンピースの世界にします」

「ワンピース…かの？随分とまあメジャーな所に行ったのう」

「うつさいです！ー！やっぱ好きなアニメですし。」

「まあ、いいそのまま行ってもつまらないだろうからの、取りあえず、あの人気漫画のアイルランドの光の御子こと某槍の兄ちゃんの身体能力と戦闘センスとゲイ・ボルグをやる」

おお…神よ…

「ふむ、それだけではのう…

せつかくワンピースに行くんじゃ。悪魔の実を食べないと面白くないの…

お主何か欲しい実はあるか？」

「ええっと…」

迷うな…

どうしようか…

「…いえ、私には決められません。」

「ふむ、分かった。こちらで何とかしておこう。あと家をサービスしといたからの。では、さらばじゃ。気をつけての」

目の前が段々と黒くなり、白い空間も爺さんも見えなくなっていく。

新しい人生がこれから始まるようです。

## 熊さん発見

…見なれない空だ。

ここは… どこだ？

…はっ！！

おれは転生したんじゃないか！？

ここはどこなんだ？

ふう、取りあえず状況を整理しよう。

まず、体…問題なし

頭…問題なし

つてか、転生じゃなくてトリップじゃねえか…

まあ いいか…

とりあえず、探索と行きますかな…しばらく歩いてみる…

するとどうだろう。

森の熊さんに出会ってしまったではないか…！

え… 詰んだ？

まだだ！まだ諦めるな！！どうする？どうするよ…俺！

- 1 . 諦める
- 2 . 戦う
- 3 . 逃げる
- 4 . 現実逃避

うん！！4が理想的だね  
だけど選んだら死ぬね！

よし！！逃げよう。

全力で。

え？戦え？勘弁してくれよ。  
だってあいつ…

目え血走ってて怖えんだよ！

そんなこんなで大爆走。もう必死です。  
なるべく下り坂を選んで必死です。

でもね、早いんだね。俺も熊さんも  
ビックリだよ。

流石はクーフリーンパワーあ！

付いて来れるって熊さん何者？必死の大爆走の末、何とか振り切り  
ました。

危なかったぁ…！

で、…ここでしょう。もとの場所も知りませんが、ここは更に  
人気がなさそうです。しかも周りが山への道を除き海で囲まれてい  
ます。

熊さん来たら詰みですね。分かります。

山への道にも熊さん居ましたね。

残念ながら来なくても詰みのようです。

…弱りましたねえ。

…おや？あれは？

助かりました！！家です！入りましょう。すぐ入りましょう。

~~~~~

ふう〜。一息つけましたあ。

いやいやいや。

和んでる場合じゃありませんね！

すぐに熊さん対策を立てなくては…

先ほど確認しましたが、身体能力は著しく向上していますがゲイ・ボルグと戦闘能力についてはさっぱり分かりません。

参りましたねえ。

おや？

こゝこれは…

手紙、と…

悪魔の実……ですね。

## 悪魔の実

…まず手紙を読みましようか。全てはそれからです！

—————

この手紙を見ているという事は無事にそちらに着いたという訳じゃない。

（まあな…）

まあ着くように案内を付けたがら当然じゃな。案内役はなかなか愛くるしくかったじやろう？

（案内役？愛くるしい？どついう事だ？）

…あの熊さん。

（テメエかああああ！！愛くるしいだと？毛深すぎるわボケ！頭わいてんじゃねえのかオラ！

ふざけんなよお…テメエのせいで俺は…（以下略）

…はぁ！はぁっ！

お見苦しい所をお見せしました。

さて、続きを読みましようね。

それでのう…

その…な…

送る時代を間違えてしまった！（テへ）

（え？）

原作の少し前に送ろうと思ったのじゃがな、間違えて900年前に送ってしまった！

（いやいやいや、どうやって介入しろと？）

…ま、しゃーないの。

これは諦めよ。

時には肝心じゃ。

（ふっざっつけんなぁぁぁ！！何だとコラ！！テメエはまた…（  
割愛））

ふうっ！ふうっ！

……どうでしょうか。ま、まあ続きがあるのでそれに掛けましよう。

それでのう、流石にもう一回という訳にはいかんからの。  
悪魔の実でカバーすることにした！  
その悪魔の実はのう…

『トキトキの実』  
じゃ。

これはのう、その名の通り、時を操る力じゃ。時とは万物全てに影響を及ぼす。よって数十年程度ではこの力を操る事は叶わん。  
己の体の時を操れば、永久に生きていけるじゃろう。

この辺りには何者も寄りつけんようになっておる。

じゃから暫く修行をするといいいじゃろう。

おお！そうじゃそうじゃ！ゲイ・ボルグは念じれば出るようになっておる。

まあ頑張れ。

あと、お主は自分の名前を決める事じゃな。前の名は使えんようになっておる。

ではな、

『いつもあなたの心の中に…』

B y 神

――――

……。

ビリッ！ビリッ！

ふう〜。最後の言葉が非常に気に入らなかったので破り捨ててしまいましたが、なかなかいい仕事してくれますね。

さて、早速ですが悪魔の実…  
いただきますよう。

ぱくっ！

… オエロロロロ…！

うえっオエっ！

…油断しました…。

流石は悪魔の実ですね。ハンパないですね。  
口に入れた瞬間に吐き出してしまいました。

……いやですねえ。

食べたくありませんねえ。

これは食べなければあとあと困りますが、死んでも食べたくない味でした。

一度食べかけたせいで恐怖をビンビン感じますね。

どないしましょ。

食べないと…

食べないと…

食べないと…

大丈夫…

いける…

いける…

逝ける…

よし！！（刮目）

ぱくっ！

~~~~~

暫く動けませんでした。これは凄いです。これだけで兵器になるんじゃないでしょうか。

さて…と

最大の難関を突破した所ですし、自分の名前でも決めましょうか。

ふむ。

どうしましょう。

前の名前を適当にもじろうと思ったのですが、前の名前を思い出せません。

新しい名前を付けましょうか。

時…ですか。

ふむ…時…

やはり時の神様の名前を頂きましょうか。

では、私は今この時より、

『クロノス』と名乗りましょう。

## 主人公設定（改）

○クロノス。

本作の主人公。

本人は丁寧な言葉遣いを心がけているが、あまりにキレたり、突っ込んだり、驚いた時はたまに乱暴になってしまるのが最近の悩み。

容姿は黒髪と黒目、髪の長さは肩につくかつかないくらい。

少し天然パーマ

カツコイイ分類に入る。

その身体能力はFateのクーフリーンと同等で最近は槍の修行と覇気の修行をメインに、料理などをサブにおこなっている

（この設定でるかは未定）

『悪魔の実』

『トキトキの実』  
の時人間。

文字通り時を操る。

その力は個人から世界まで、過去から未来まで全てに影響を及ぼす。

分類は一応超人系。

だが、時には概念的に攻撃どころか、干涉すらできないので実際は自然系と同等以上。

主な弱点はなし。

〈宝具〉

『ゲイ・ボルグ』

クーフリーンの宝具を神様からもらった。

因果をねじ曲げ、心臓に刺さるという結果を作りだす。

## 旅立ち

悪魔の実を食べてから早80年……

え？飛ばしすぎ？

仕方ないでしょう。900年という歳月は私にとっても長いんですよ……。 (涙)

ーさて、気を取り直しまして、この80年を軽く振り返りましょうか。

~~~~~足跡(00~80年)~~~~

00年 ONE PIECEの世界へ。熊さんとの出会い。手紙&amp;mp・悪魔の実発見！

01年 未だ能力発動せず 基礎鍛錬

05年 能力発動！（微）

06年 熊の襲撃↓逃亡

10年 熊の襲撃↓反撃↓返り討ち

12年 熊の襲撃↓反撃↓返り討ち

42年 熊の襲撃↓反撃↓討ち取った！

43年 熊の復讐（群）↓逃亡（必死）

60年 熊と和解。寿命迫る！

63年 『老化』の停止。コツを掴んだ！

80年 完全制御。『老化』の巻き戻し。19歳の体に！

~~~~~

…いやあ、頑張りました。

特に60歳の時はマジヤバイ！！と思いましたがよ。

…てか熊強過ぎじゃね？クーフリーンの技術をまだ完全に会得してないとはいえ、大体中将くらいの強さはあると思うのだけれど…。

…何故こんなに強いんでしょう。

…まあ、いいとしましょう。80年間も頑張ったかいがあり、いつの間にか覇気も使えるようになってました。

おおそうです！何と私、霸王色の覇気も使えるようになっていました。

流石はクーフリーンの超スペックですね！！ビックリです。

武術は完璧です！流石に暇だったので見よう見まねで六式をやってみた所、ハマってしましまして、全てを極めてしまいました！

…ふう、今考えると指銃と鉄塊いりませんでしたね。

さて…と。

この私の味気ない人生を振り返ってる間にいつの間にか囲まれました。

恐竜…ですね。大量にいらっやいますね。

覇気で倒してもいいのですが、旅立ちの景気づけに派手に暴れましようか！

“GYAAAAA”

「うるさいですねえ。今この場で始末して差し上げるので、少しの間静かになさい。」

腰を落として、ゲイ・ボルグを構える

「『加速』」

自分の時を加速させ、一瞬で最も大きな恐竜の背後をとり首を落とす。

他の恐竜達は私の姿が消えたことに驚き、うろたえる。

そのすぐ後に殺された恐竜を見て怒りの声を上げながらこちらに向け走ってきます。

「ふう、全く、力の差も理解出来ないようですね。一撃で決めましようか」

槍を握る手に力を込め、斬撃を放つ。

「『時間反芻』」

斬撃を放った瞬間に能力を使い、放つ寸前に戻り、また放つ。  
これを刹那に数十回と繰り返す。

斬撃が隙間なく敷き詰められ、斬撃による弾幕を形成する。

面による斬撃に恐竜達は耐えきれず、ただの肉切れと化す。

「ふふふ…。なかなか幸先のよい旅立ちですね」。

さて…と、どうも海の方こう側になにやら大きな町がありそうですね。月歩で渡りきるのは少しばかり疲れそうですね…

まあ、山を通って熊さん刺激するのもいやですし…。

仕方がないですね。筋肉痛くらいは覚悟するのでしょうか。」

## 出会い

ふう…。以外と海は広いんですね。  
月歩し続けること約20時間。

え？こんなに早く着くわけないだろ？

チツチツチ！甘いですよ！

何と、『月歩』と『剃』と『加速』を同時に使ってみました！  
名付けるとすれば…『瞬速』ですね！  
これは凄いです！ハンパなく早いです！

…まあ、そのおかげで今筋肉が大変なことになっているのですかね  
ね…

仕方がありません。今日は一日中野宿して、明日、町…いえ、この  
規模は国ですね。に、入りましょう。

~~~~~イヤあ、一日中寝たらようやく疲れが  
とれました！

体が軽くてハイテンションになってしまいそうです！

…はい、もういいですね、すみません。

とりあえず状況説明させていただきますね。

ここは城下町です。街並みは中世ヨーロッパのような感じですが、使われている技術は非常に高いですね…。

…困りました。

この世界に来てから80年、ずっと自給自足だったためにお金が一銭たりともありません！

物々交換でなんとかかなるかな？と思ったのですが、しっかりお金使ってますね。

…仕方がありません。最終手段をとりましょう。

ふふふふ…

やってやります！

いざ…！

「『時間停止』」

ピタつと。よし！！これはこの名の通り、時を止めてしまいます！  
これさえあれば無敵！最強！チート！

…と思うでしょう。

残念ながら世界はそんなに甘くないんですね。

自分以外全ての時を止めてしまったため、相手に干渉できません。  
しかもこれ、負担が大きすぎて何回も出来ないんですよ。

今数秒止めて、近くの女性から財布をすっただけで過呼吸に陥って  
しまいました。

……ふう。少し落ち着きました。

…おや？ナンパ？許せませんね！女性1人に男が5人も寄ってたか  
って…

ま、スルーしますが。

ん？

…あれ？

…あれ？

何かあの女性に激しく見覚えがあるのですが…

はっ！あ、あ、あの女性は…

…先程、財布をすった方ですね…。  
少しお話聞いてみましょうか。

「ーーよお、姉ちゃん。だから言っただろ？今は俺ら金が足んねえんだよ。だから金さえよこせば何もしいって言っただろ？だからよお、ないふりしないでさっさと出せよ！」

「す、すみません。本当に見つかからないんですっ！ごめんなさい！さっきまであったはずなのに…、ど、どこにいっちゃったの？どどどどうしましょうー！」

…あれ？

もしかして…いや、もしかしくても100%私のせいですね。

なぜか凄い罪悪感を感じます。

普段なら厄介事はごめんなのでスルーですが…

…これは助けないと人間としてダメな気がします。

…仕方がありませんね。

「お兄さん方、男が女性を囲い込んで脅迫なんて…  
関心しませんねえ」

「ああ？何だと？テメエこの娘のコレか？」

ヤンキー共が小指を立ててニヤニヤします。

キモい…。

「そんなんじゃないありませんよ。ただの通りすがりの常識人です。」

「はあ？ はははは！ おいおい聞いたか？ 正義のヒーロー気取りのくそヤローだ！

親の顔が見てみてえ……うっ！！」

…流石に親の悪口を聞き流せるほど私は人間できてませんからね…。  
つい覇気でやっちゃいました」

「あ、あの！ 助けていただいてありがとうございます！」

…そっといえば今気がつきましたがこの女性…とても綺麗な方ですね。

金髪のロングに綺麗な青色の目。

スタイルもでる所は出てひっこむ所はひっこんでいます。

ナイスプロポーションですね。

「いえいえ…当然の事をしたまでです。」

女性は浮かない顔をしている。

「どうかしましたか？」

「…いえ、あの、その、…財布をなくしてしまいました…」

ああ、その事ですか。ならばスルーです。この金は私にとっても命を繋ぐものですから。

「お金は別にいいんですが…、大切な友達からの御守りが入ってます…」

ま、眩しい！！  
む…無理だ…  
俺には無理だ…

「あ、ああ、そうです！さっきその道で拾ったのですが、これはあなたのですか？」

「そ、そうです！それ私のです！ありがとうございます！」

「え、ええ…」

止めてー！ー！！

お礼なんて言わないでー！

計画は失敗です。

残念ですが、なんかとても清々しいです。

「あ、そうです！助けていただいた上に財布まで拾っていただいたのに、お礼しない訳にはいきません。

私の家に来ていただけますか？」

おや…？これは…棚からぼた餅ですね！

清々しい気分がどこかへ消えてしまいました！が、せっかくです！しばらく宿を借りさせていただきます！

「えっと…」

私が助けたのはただの『善意』なのですから本来なら受け取る訳にはいかないんですが…

せっかくのご好意ですから、ありがたく受け取らせていただきます。

では、行きましょう」

ニコツと微笑む。

女性が真っ赤になりました。

…やってしまったかもしれません。

「お、お名前を聞かせていただいてもよろしいですか？」

「はい、クロノスと申します。あなたは？」

「レ、レアです。」

レア・D・アステリアです。」

「レア…ですね。それでは参りましょうか。…ところで家はどちらです？」

「は、はい！あの、あそこになります。」

レアは躊躇いがちに王城を指で差す。

…は？えっ？ちよっ！？  
…マジですか！？

## 王城

ども

前話の最後から王城に連れてかれそうになっているクロノスです。

レアはものの見事に姫様でした。

…前話って何でしょう。

なんかビビッと受信したのですが…

まあ、いいとしましょう。

話を戻しますが、王城何て冗談じゃありません。  
何やら危険なフラグがやまほどありそうです！

「えっ…と、すみません。私、用事を思い出しまして…」

途端にレアが悲しそうな顔をします。

…そんな顔でこちらを見ないでください

「だ、駄目…ですよ。王女なんて、絶対引きますよね。」

泣きそうな震える声でそれでいて自重めいた発言をします。

…さようなら安全。

そしてこんには数々の危険フラグ。

それでも紳士を自称する私にはこのような綺麗な女性を泣かせるなど死んでもできません。

「駄目じゃないですよ！身分なんて関係ありません！私はあなたの肩書きなどではなく、あなたの本質を、あなた自身を見ますから！  
さあ、行きましょう。」

レアに手を伸ばすとレアはまた真っ赤になっています。

…新たなヤバイフラグを盤石なものにしてしまった気がします…

…うん、気のせいですね。そうしましょう。

レアは私の手を取り、嬉しそうに「はい！」と言います。

さっきまで流しかけていた涙がキラキラと光を反射してさらにレアを綺麗に見せます。

――まあ、こういうのも悪くはないですね。

~~~~~

そんなこんなをしてるうちに王城に着いてしまいました。

覚悟を決めた筈なのですが、何故か第6感が警報をならしています。

まあここまで来てしまいましたし、レアを悲しませたくはないので逃げるという選択肢は使えないのですが…

「おい！貴様！何者だ！ここは王城だぞ！さっさと帰れ！」

おやおや、門番に引っかかってしまいました。

「私は第4王女、レア・D・アステリアです。こちらは私の恩人であるクロノスさんです。ここを通しなさい。」

途端に青ざめる門番達。

まあ当然ですね。

「レア様でしたか！これは大変なご無礼を。お許しください。

えっと…レア様の恩人とはいえ簡単に城に入れるわけにはいかない  
ので、ここでしばらくお待ちください。」

「レアはやっぱり王女なんですねえ。」

「信じてなかったんですかぁ！」

頬をぶくつと膨らませ、怒っているポーズをとります。

可愛いので怒られている気がまったくしません。

そんなこんなをしていると、先程の門番が小走りで帰ってきました。

「遅くなり申し訳ありませんでした。  
入城の許可が出ました。」

ただし、まず王の間に来ていただきます。」

ああ、嫌な予感がビシバシします。

~~~~~

「ふむ。面を上げよ。」

「はっ！」

もう分かると思いますが、私はいま王様に謁見しています。

むう、なかなかの覇気です。  
これが王の威厳ですか。

「ふむ。レアから話しは聞いた。まず助けてくれた事に礼を言おう。」

「いえ、当然の事をしたまでです。」

すると王様はニヤリとしました。

…嫌な予感が最高値に達しました。

「ふむふむ。たしかに当然の事じゃな。原因が原因だからのう。」

…なに？

「もっと近う寄れ。」

言われた通り近くに寄る。

「ふむ、これなんじゃが…見てくれるか」

その映像には、私がレアの財布をすってる姿がばっちり映っていました。

…何故に！？

「先程衛星から送られてきた映像じゃ。」

…やられました。

私は効果範囲を地上に設定してましたから、まさか宇宙からとは…

…さて、逃げましょう。

「まあまあ、そう身構えるな。そうじゃ！褒美をとらせねばならん！  
ふむ、では暫くこの王城に泊まって行くがよい。  
その方がレアも喜ぶしの。」

レアを見てみると顔を真っ赤にしながら、激しく首を縦にふっています。

…逃げられません。

「まあ、滞在している間はレアの話し相手になってくれればよい。  
暫く滞在するのじゃろ？」

…詰みですね。

「はい…。」

## 日常

くクロノスの気まぐれ日記く

王城に住み始めて早半年

最早城の大半の人と顔見知りになりました。

最近は厨房にて料理長から直々に料理を教わっています。

最初の頃は大変でした。

王様は事ある事に私に仕事を押し付けるし、

レアは無理やり私を連れて城下町へと繰り出すし、

レア付きのメイド（御守り渡した人）はレアに何やら怪しげな事を吹き込んでましたし…

（既成事実やら、夜這いやら……）

よく私いままで無事でしたよネ…

まあ気を取り直しまして、そろそろこの国を出て行こうかなと思います。

城のお手伝いはある程度の給料貰えましたし、まだ世界を見てまわりたいですからね。

レアに言うのは少し大変そうですが、彼女は賢いのできつとわかってくれる筈です。

おっと…

そろそろレアを起こしに行かなければならない時間ですね。

それではまた書くその時まで。

---

コンコンコン…

「レア？そろそろ時間です。入りますよ。」

ガチャ…

レアはまだ寝てますね…

近くまで行き、髪を撫でます。  
とても柔らかくサラサラですね。

「レア？起きてください。」

もぞもぞと動き出します。

「ふああ？」

レアは頑張って開いた微かな目の隙間から私の顔を見ます。

「ふえ？…えっ！えっ！クロノスさん？何でいるんですか！」

「何でって…」

あなたのメイドさんが朝は私に起こして欲しがっているとお願いに来たんですよ？」

「コトハが？もう…コトハったらまた勝手に…  
（ボソ）まあ嬉しいですけど…」

「ん？何か言いましたか？」

「い、いえ！何でもありませんよ！そ、それより早くご飯食べて今日は庭園にでも一緒に行きましょう！」

「はいはい、分かりました。さ、早く着替えて支度してください。今日はあなたの大好きなエレファントホンマグロの刺身だそうですよ？」

「え！分かりました。すぐに行きます！クロノスさんも一緒に食べてくださるんですね？」

「いえ、私はただの相談役ですから…」

「た・べ・て・くださるんですね？」

…こついつ時のレアは怖いです。

有無を言わせないほどの覇気が滲み出ています。

…王様超えてるのは流石と誉めるべきなのでしょうが…

「はあ…分かりました。では早く支度してください。ドアのそばで待っていますから。」

「着替え手伝ってください！」

「寝言は寝て言ってください。」

「むー、鬼！悪魔！甲斐性なしー…」

ボタン！

後ろからまだ何か聞こえてきます。

まあ無視ですが…

最初は大変だと思っていたこの城での仕事もだんだん板についてきました。

ですが、そろそろここから離れなくては愛着がでてきて離れられなくなりそうです。

私には寿命がありません。

これを知っているのは最初に問い詰められた王様だけですし、レアには言わないように釘をさしています。

レアは最近よく笑うようになったとメイド達は話しています。

その原因が私だということも薄々は感じています。

ですが私はここに留まる訳にはいきません。

レアなら受け入れてくれるかもしれませんが、もし受け入れられなかったらと思うととても精神を保っていられる保証がありません。

やはりこれが一番幸せなんです。

私達は関わるべきではないのです…。

## 告白

王城でお世話になるようになり始めてすでに7カ月。

秘密裏に進めていた旅立ちの準備が整いました。

あとはこの城の方々に挨拶をすれば旅立ちです。

「すみません。入りますよ。」

ガチャ…

「ああ、コトハさんですか。どうかしましたか？」

「行く… んですね。」

「やっぱりあなたにはばれましたか。」

「もちろんです。私は姫様付きのメイドですし、姫様の良き友人ですから。あなたの行動など全てお見通しです。」

「…そうでしたね。あなたには隠し事はできませんでしたね。」

「考え直してはいただけないんですか？」

「ええ。このままではお互いとこの国の迷惑になりますから。」

「民に能力だと公表されれば…」

「分かっているでしょう？ 混乱がおこるだけです。私は民から人望

があるわけでもないので鎮めることなど出来ません。」

「ですが…」

「それに、私は先に旅立たれるのは勘弁です。」

「……。」

分かりました。ちゃんと姫様に殴られてから行ってくださいね。」

「もちろんですよ。では、レアがいつも通り庭園で待ってるでしょうから行かねばなりません。」

~~~~~

Side  
レア

うー！

クロノスと一緒に生活し始めて7か月…

って言ってもただ一つ屋根の下にいるだけであって！

けっして！けっして！どどと同棲というわけじゃないんですよ！

違うんですからね！

いや…

確かに格好いいし、優しいし、どどと同棲してもいい、いいんですよ！？

はあ…。

いまだにクロノスさんを見るたびに胸が熱くなるんです…。

いつになれば慣れるんでしょうか。

コトハは強引な手法しか教えてくれませんし…

私は一生このままにもないんで終わるんでしょうか…。

どうでしょうか。

最近コトハがさらに過激なことを無理やりやらせようとしていますし…

何か焦ってるように…

まあ考えても仕方ありませんか。

…よし！今日こそは頑張って進展させたいと思います！

早く来ませんかねえ♪

〔Side Out〕

庭園に着きました。

レアは…

あっ！いました！

「レア！お待たせしてしまいましたか？」

「い、いえ！待ってません！」

「それは良かったです。さて、今日は庭園内を一緒に散歩でもどうですか？」

「は、はい！」

「やはり、この花は綺麗ですね。」

「は、はい…」

あ…あの、クロノスさん。」

「ん？どうかしましたか？レア？」

「いえ…」

普段と違う感じがしたので…」

「…分かりますか。伊達に7カ月共に過ごした訳ではありませんからね。」

「どうか…なさったのですか？」

「レア…私は…」

そろそろここを出て行くのかと思っています。」

「え？な…なんで…ですか…私のせい…ですか？」

「そんなわけないじゃないですか。  
私の性質のせいとでも考えてください。  
いきなりですみません。」

「……今までありがとうございました。」

バチっ！

思いつき叩かれました。

「なんでですか!!」

なんで…なんで…なんでなんですか…。

私は…私は…あなたが、クロノスさんが大好きでした!!  
愛していました!

クロノスさんをずっとお慕いしていました…」

段々ちからがなくなっていきます。

そこまで言ったらレアは泣き崩れてしまいました。

…私にそんな権利はありませんが、私はレアを優しく抱き寄せました。

レアは少しも拒まず、ただ泣いていました…。

~~~~~

## 宣戦布告

あれから時は過ぎていき・・・

早くも別れから3ヶ月が経っていた。。

SIDE???

ふむ・・・やはりあの国の技術と思想は脅威だ。

そしてあの国にはその思想を全ての国に強要する程の力を持っている。

ええ。あの国は放置すれば、いずれは我々の正義の障害となりうる可能性が大きい。

それではやはり・・・

それが良いじやろう・・・

・・・ふむ。よろしい。

それでは全会一致で・・・ということではよろしいか。

「「「異議なし」」」

「……それでは、全ての同盟国に通達！我々『世界連合』は  
かの国……」

『ダリア』に宣戦布告する！！

S I D E   O U T

S I D E   ダリア

「王様！王様！緊急報告です！！」

「なんじゃ……騒がしいのう。今日はレアとお茶しようとおもっ  
とったのに！」

「報告します！『世界連合』が、我々『ダリア』に宣戦布告してき  
ました！」

王様の目が変わる。

「……きたか。できればレアが大きくなるまでは待つてほしかっ

たな。

・・・迎撃準備！国境に第1、2、3艦隊を派遣。旗艦は第一艦隊の『ダイダロス』サポートに第2、3艦隊の『ブルトン』及び『ポセイドン』

並びに悪魔の森林より実を採ってきて隊長格以上の望む人間に食べさせる。

城の国庫に技術の粋を使い調べあげてきた図鑑があったはずだ。それを参考にしろ。」

「ハッ！！」

ザザザザ・・・いきなり騒がしくなってきた

はあ。いずれはくると思っていたが・・・まあいい。レアがこの国から離れてくれないのは問題だが・・・

まあ仕方がないだろう。クロノス殿ももうちょっといてくれるかレアを連れて行ってくれると助かったのだが・・・

そういえばクロノス殿の悪魔の実はどうやって手に入れたのだろうか・・・

悪魔の森林は他の地域にもあるということなのだろうか・・・

・・・まあいいだろう。考えても詮無きことか。

いまある手で最善のものをうてばいい。

やるならば短期決戦。

技術でのし上がってきたこの国には食料は貿易に頼りきっていたからな。

・・・だが

おそらくは長期に渡るだろうな。

相手は世界・・・か。

多勢に無勢。

ならば・・・

やはりこの計画を実行に移すしかないのだろうか。

王は一つの紙束をみながらそう考えていた・・・。

”計画名 ダリア Dの意思”

~~~~~

SIDE レア

・・・なにやら騒がしい。いつも静かな庭園にまでもものしい雰  
囲気が漂っている。

「コトハ？何かあったのですか？」

私付きのメイドであるコトハがかなり焦っている。  
非常に珍しいことだ

普段ならありえないその光景に何かあったのだと察する

「姫様。いい加減にここから離れてください！ついに宣戦布告を受けました！すでに第1〜第3王女の避難及び擬態は終わっています。あとは姫様だけです！」

なるほど・・・。

そういうことでしたか・・・。

「コトハ。分かっているでしょう？私は父様や、この国の民を見捨てる訳にはいきません。」

「ですが!!!」

「これ以上は無駄です。私は何を言われても考えを変える気はありません。」

さあ行きますよ。民の混乱を鎮めなければなりません。」

クロノスさん。

あなたがいなくなって寂しく、悲しいですが、貴方のことを巻き込

まずにすみ少し安心しました。  
私はけつしてあきらめません。

この国のことも、あなたのことも・・・。

この国が落ち着いた時にでも、またいらしてくださいね・・・。

「姫様!!」

「さあ!行きますよ」

S I D E   O U T

## 戦争直前

それから2ヵ月…

『世界連合』の宣戦布告を公表したダリア国内は最初の方こそ慌ただしかったが、第4王女レア・D・アステリアを中心とした一部の者達により少しずつ落ち着きを見せていた…

S i d e   ダリア

宣戦布告から2ヵ月か…

密偵からは艦隊が準備されつつあるという…。

技術力は圧倒的にかつてはいるが、物量作戦でくると…

…はあ。

頭が痛くなるな…

さてさてどうしたものか…

S i d e  
O u t

宣戦布告から2ヶ月…

連合はダリアに対し大艦隊派遣を決定

世界各地より戦力を集めていた…

S I D E  
連合

もうすぐだ…

もつじき我等が世界を手中に収めることができる

我等こそ正義だ

そう、我等が正義なのだ・・・

「元帥、全艦隊配備終了しました。」

「・・・よし。すぐに行く。」

S I D E   O U T

宣戦布告より3ヶ月・・・

艦隊の配備を終了させた連合はダリアへと侵攻作戦を開始した

その戦力は15艦隊・・・

ダリアの約5倍の戦力を持って第一陣を出発させた・・・

ダリア側はこれを自らの領海にて迎撃作戦を開始しようとする・・・

後の世では知られることのない大戦争が勃発しようとしていた。

## 戦争開始(?)

宣戦布告から7ヶ月・・・

戦争は全ての人を少なからず巻き込み、世界は2つに分かれていた。

1つは『ダリア』、もう1つは『世界連合』

『ダリア』はその進みすぎたテクノロジーを駆使し、『世界連合』は、その圧倒的な物量を持って。

だが、いくら『ダリア』が優れていても、多勢に無勢。

前線は押されっぱなしだった。

そこでダリアは新兵器を投入。

それは『人間』だった。

・・・いや、正しくは『悪魔のごとき特殊な力を持った人間』だ。

その力はすさまじく、一時は前線を押し返すことに成功する・・・。

だが、連合にも優秀な科学者は存在している。

科学者達は、捕縛した能力者を使い、人体実験を繰り返し、その身は海のエネルギーに弱いということが判明する。

そこで海のエネルギーを持った海棲石を加工し武器に使用、対抗兵器として投入。

再びその圧倒的な物量差をもって、前線をさらに押し返し、ついには旗艦『ダイダロス』を破壊。

『プルトン』や『ポセイドン』など、後に古代兵器として語り継がれるであろうオーバーテクノロジーの塊ですら、押しのけることに成功する。

だが、それまでに出した連合の被害も甚大であった。

特に古代兵器の力はすさまじく、連合は第2陣、第3陣と次々と戦力を投入することで対応したせいで、戦艦は湯水のように消えた。それでも押しのけることに成功したのは単に資源の問題だった。

兵器を惜しまずに使用したせいで、弾薬や燃料の補給がままならず、結果として十分な力を発揮できなかったことが勝負の決め手と

なった。

そして、遂に連合はダリア本土への上陸に成功。

戦場は海上から地上へと移る。

地上戦でもダリアの技術力は異常であつた。

例えば太陽光を一点に集中させ、それを反射鏡により一気に打ち出す『レーザー』や、様々な危険とされている生物を掛け合わせてうみだされた『キマイラ』など、主に遠距離からの攻撃、または人外を使うなどをして人間をなるべく戦場に送り出さないようにすることで、前線は膠着状態が続いていた。

特に自然エネルギーを利用した大量殺人兵器は特に目ざましい働きをして、このまましばらくは前線が動くことはないだろうと予想されていた……。

宣戦布告から12ヶ月……

戦争を始めて早1年。大戦争と呼ぶにはあまりにも短い時間だが戦争は徐々に終結へと進み始めた。

ダリアは連合によって追い詰められていた。

当初前線は動かないと予想されたのは自然エネルギーの長所にあつた。

それはエネルギー切れがないという部分だった。

曇りや雨のさいには使えないという短所もあつたが、ダリアの気候は乾燥帯であつたため、雨や曇りの日はめつたになかつた。そのため、レーザーの働きは大きいとようそうされていた。

だが天はダリアの味方をしなかつた。

戦場には雨や曇りの日が続いた・・・。

ダリアは生物兵器も次々と投入するが連合の犠牲をも恐れぬ異常な進攻方針も相まって前線は少しずつ押し込まれていった。

宣戦布告から15ヶ月・・・

ついに連合はダリアの王都目前まで迫ることに成功する。

この時点で『ダリア』の敗北は決定していたが、決してダリアは降伏をよしとはしなかつた。

それは当然だった。

連合はダリアの思想を嫌い、その思想に影響を受けているであろう国民たちをも嫌っていた。

降伏した場合、虐殺が起ころうことは火を見るよりも明らかだった。

それは国民たちも知っていたため降伏を望む人間は一人たりともいなかった・・・。

## 始動

連合が王都目前まで進軍する、そのちょうど1ヶ月前。

世俗との繋がりを絶ち、山に籠もって修行に明け暮れていたある人物が買い出しの為山を降りていた…。

〈SIDE クロノス〉

皆さん。お久しぶりです。クロノスです。ダリアを離れて1年です。

私的にはもう90年ほど生きているためあまり長かった感じはしません…。

まあ、いまはおいておきましょう。

私は現在ダリアからかなり遠い所にある小さな町に来ています。

ここから近い山に私の家があるのですが、調味料などを大量に買っておこうと思ひましてね。

…それにしてもなんだか空気がピリピリしていますね。  
なにか大きな事件でもあったのでしょうかね。

…まあ私にとっては関係ありませんがね。

おっ！店がありました。どうやらここが一番大きい店のようですし、纏めて買って行きましょうか。

カランカラン

ああ店員さんですね。なかなか人当たりの良さそうなおじさんが此方に気づいたようです。

「いらつしゃい。おや？兄ちゃんこの辺じゃ見ない顔だねえ。」

「ええ。近くの山に住んでいまして。今日は買い物に来たんです。しばらくこういう機会はなくなると思うんで、まとめて買いたいのですが…。」

おじさんは少し困ったような、申し訳なさそうな何とも言えない顔です。

「そうか…。いや、すまねえな。あいにく戦争のせいだな。あまり量がないんだ。それでもいいか？」

戦争…。だからですか。こんなに空気が重いのは。

「ええ。それで構いません。それにしても戦争ですか…。イヤですねえ。」

「まったくだ。しかもダリアと連合の戦争だからな。規模がでかくて毎日巻き込まれんじゃねえかって、気が気じゃねえよ…。」

「ッ!？」

ダリアと…連合だと!？

「その話を詳しく教えてください!！」

「お、おう!ちょうど1年前のことだ。連合はダリアに宣戦布告しまんだ。」

1年前！？私が出てからすぐ後ですか！！

「表向きの理由は国王が悪政を敷いているから民の解放。というのが…。」

実の理由はダリアの思想を潰すためだ。

それなりに情報に精通している者ならみんな知ってる。

…まあ、知っているからといって手を出せる訳じゃねえんだけどよ…。」

…まあ、それはそうでしょうね。

手を出そうものなら一瞬で消されてしまうでしょうし…。」

「で？どちらが勝っているんですか？…いえ、それより王族は？もう既に避難しているんですか！？」

「…いや、そんな話しは聞かねえな。逃げたとしても極秘裏にだろう。戦場は既にダリアだからな。」

…そう簡単には情報は入って来ねえ。」

ダリア！？ということは押されているのか…。」

レア…。レアだけでも助けなければ！！

「ご主人！情報提供感謝します！！申し訳ありませんが、行かなければならない所が出来ましたので、これで失礼します。」

「お、おい！？兄ちゃん！まさかダリアに…戦場に行く気かい！？やめとけ！…おい！おい！！」

慌てて店を出て、全力でダリアに向けて走り出します。

レア！？レア！？レア！！…頼む。無事でいてください…。

S I D E   O U T

戦争から16ヶ月…。

戦争は着実に終戦に向け進んでいた。

世界の国々だけでなく、天候にまで見放されたダリアに勝つ術は残ってはいなかった。できることといえば、ただ進攻を遅らせることくらいだけだった。

それこそダリアは使える全ての手段を使って遅らせた。

例えば情報操作をし、前線を遅らせたり…。

例えば反連合の国々や反乱組織、革命家を煽り連合にぶつけたり。

だがいかなる手を尽くしても遅らせることが限界だった。

それどころか、裏目にでてしまう事も多かった。反乱組織は離反者が出て、ダリアと繋がっている証拠をつかまれ、それを公表されたり、反連合の国々がダリアに追い詰められすぎて連合に味方。対ダリア戦に参加を表明したりと、世間ではダリアの風評は下落を続け、世界は反ダリアに傾きかけている状況であつた。

そんな追い詰められたダリアには出来る事が限りなく少なかった。

連合に察せられないように少しずつ国民を国の外に逃がしたり、混乱を鎮めるくらいしか出来る事はなかったのである。

S I D E

連合

「…ついに、ついにこの時がやって来た。多くの犠牲を出した。

だが！！これであの異端の国を殲滅する事ができる！」

「その通りだ。虫一匹生かして帰すな。」

「当然だ。…奴らを、奴らの国を地図から消してみせよう！！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7434q/>

---

時の海賊

2011年8月15日22時24分発行